

<平成 24 年度研究プロジェクト「2012 年の北朝鮮」分析レポート>
金正恩時代の国内政治について

平井久志（ジャーナリスト / 共同通信客員論説委員）

2012 年度の外務省国際問題調査研究・提言事業費補助金による日本国際問題研究所プロジェクト「2012 年の北朝鮮」で、北朝鮮の「国内政治」を担当することになった。6 月 25 日の第 2 回研究会で、昨年 12 月に金正日総書記が死亡して以来の約半年間の北朝鮮の国内政治の流れを 金正恩体制の思想やスローガンの側面での推移 指導部の人事から見た分析 金正恩氏のリーダーシップの分析という 3 点からの私見を報告した。

その後、朝鮮労働党中央委政治局会議が 7 月 15 日付で金正恩氏の最側近とされた李英鎬総参謀長を「すべての職務」から解任するという決定を下し、同 16 日には玄永哲大将が次帥に昇格し、総参謀長に就任した。さらに党中央委など 4 機関が 7 月 17 日付で金正恩氏に共和国元帥の称号を授与した。

4 月 11 日に開催された第 4 回党代表者会での人事の大きな特色は李英鎬総参謀長への牽制、包囲網の形成であったが、これがわずか 3 か月で、すべての職務の解任という事態にまで発展するとは驚きであった。

李英鎬総参謀長解任の背景をどう分析するかについてはまだ十分な事実関係がつかめていない。あえて筆者の現時点での私見を述べれば、この解任は 労働党が軍を統制する動きを強めたが、李英鎬参謀長が抵抗もしくは障害となり、党側が李英鎬氏を排除しようとし、金正恩氏がこれを承認した可能性 北朝鮮当局が進めつつあるとみられる経済改革に李英鎬氏が反対したか、もしくは軍部が障害になる可能性が高く、その抵抗を事前に除去するために李英鎬総参謀長を排除し、抵抗勢力を押さえ込もうとした可能性 が連動したものではないかと推論する。

最高指導者になった金正恩氏が自前の側近勢力をつくろうとした可能性、「後見人」グループでの確執、外交路線での対立など様々な推論も可能である。

ただ、大きな枠組みにおいて、労働党の組織的な機能や権限が強化される方向であることは言えるのではないかと思う。この解任劇がさらに人事的な刷新や世代交代などに向かうのかどうかがかが重要だ。

また、金正恩後継政権の最大の課題が「人民生活の向上」にあることは間違いなく、北朝鮮が 2002 年 7 月の経済改革と似たような方向性で、新たな経済管理体系を打ち出すのかどうか注視する必要がある。

以下は第 2 回研究会での報告を概観したい。

第 1 の金正恩体制での思想やスローガンの側面での推移について言えば、2012 年 1 月 1 日の労働新聞など新年共同社説で強調されたのは「遺訓貫徹」と「一心団結」であった。突然の金正日総書記の死亡だけに、新しいスローガンを掲げることは困難であった。

その次の段階の 1 月末頃から現れたのは「主体 先軍 社会主義」という 3 つの言

葉をキーワードにするスローガンである。

次いで、金正恩氏の4月6日の党中央委責任活動家に対して行った談話「偉大な金正日同志をわが党の永遠の総書記に高く戴き、チュチェ革命偉業を輝かしく完成していこう」(4月19日発表)で「全社会の金日成・金正日主義化」という言葉が出てくる。研究会メンバーの指摘では「金日成・金正日主義」という言葉が北朝鮮公式メディアに登場するのは3月31日付「労働新聞」であるが、内部的には金正日総書記の生存中に使用されていた言葉であるという。だが、この言葉が北朝鮮メディアの前面にしばしば登場し始めるのは金正恩時代になってであろう。4月11日の第4回党代表者会での党規約改正で「朝鮮労働党は偉大な金日成・金正日主義を唯一の指導理念とする金日成・金正日主義党」という規定がなされた。

金正恩氏は3月2日報道の人民軍戦略ロケット司令部視察の際に「金正日式愛国主義を高く発揮することにおいて、人民軍隊が当然に前に立たねばならない」と語り、以後「金正日愛国主義」という表現が北朝鮮の公式メディアにしばしば登場してくる。

金日成主席は「チュチェ(主体)」、金正日総書記は「先軍」という思想を前面に掲げて体制を統制してきたが、金正恩後継政権も新たな思想的な概念を模索するであろう。現時点では「遺訓貫徹と一心団結」「自主、先軍、社会主義」「金日成・金正日主義」「金正日愛国主義」という推移をたどっているが、これがどのような発展していくか見守りたい。

第2の北朝鮮指導部の人事から見た分析であるが、金正日総書記の昨年12月の葬儀に際して232人の国家葬儀委員会の名簿が発表された。この時点でも2010年9月の第3回党代表者会の中央委員、中央委員候補であったメンバーのうち金正日総書記を含め3人が死亡し、中央委員6人、中央委員候補6人が名簿から脱落していた。

また、金正日総書記死亡前からも李済剛党組織指導部第1副委員長が「交通事故」で死亡するなど疑問のある死亡を含めて多くの幹部の「退場」が進んでいた。

2011年12月28日の永訣式報道での政治序列では葬儀委員会で序列14位であった金正日総書記の妹、金慶喜氏が序列5位に、序列29位だった呉克烈国防委副委員長が序列13位に上昇し、注目された。この際の指導部28人の序列は第4回党代表者会までほぼそのまま維持された。

4月11日の第4回党代表者会と同13日の最高人民会議12期第5回会議での人事では崔龍海氏が序列4位へ大躍進。しかも党人である崔龍海氏が次帥になり軍服を着て軍総政治局長に就任。李英鎬氏は崔龍海氏の後に位置づけられた上、国防委員会に入れず、李英鎬包囲網が敷かれた。金慶喜氏は党書記になり組織担当か。軍元老格の金英春、呉克烈、李勇武の地位は下がったがそれなりの待遇。李明秀、玄哲海、朴在京という金正日時代の随行者3人組は復活。禹東則国家安全保衛部第1副部長の名前が消えた、脳溢血か。2002年7月の経済改革の中心的役割を果たした朴奉珠氏が党部長に復活 - などの特徴があった。

第3の金正恩氏のリーダーシップとしては2012年4月15日の金日成主席の誕生100周年の閲兵式の演説「先軍の旗印をより高く掲げ、最後の勝利を目指して力強く

たたかっという」4月19日に発表された党中央委責任活動家に対して行った談話「偉大な金正日同志をわが党の永遠の総書記に高く戴き、チュチェ革命偉業を輝かしく完成していこう」(4月6日付) 5月8日に発表された党、国家経済機関、勤労者団体の責任活動家に行った談話「社会主義強盛国家建設の要求に合わせ国土管理事業で革命的転換をもたらすことについて」(4月27日付) 6月6日の朝鮮少年団全国連合団体会議での祝賀演説 6月12日に発表された金日成主席誕生100周年に際し発表された労作「偉大な金日成同志はわが党と人民の永遠の首領であられる」(4月20日付) の演説、談話、労作が発表された。

現時点までの労作などは、一部を除き独創性に欠けているが、2度の肉声演説は2013年正月に金日成主席時代の「新年の辞」が復活する可能性を示唆しているのかもしれない。

また、これまでの金正恩氏の現地指導では 年初は軍に集中 時期によって分野が偏重 経済部門への現地指導が少なく崔永林首相の「現地了解」に丸投げ 金正恩氏が現地指導の際に予定されていない場所に行くという情報がある一などの特徴があった。

さらに金正恩氏は党第1書記、党中央軍事委員長、国防委第1委員長、最高司令官という職責を得て、早期に権力継承を実現したが、これが金日成主席や金正日総書記のような独裁的なリーダーシップを持つことになるのかどうかは今後の推移を見る必要がある。この上で 「首領」という地位を実質的に獲得できるかどうかという点での筆者なりの問題提起をした。 (2012年7月25日記)